野の花は生きる

——リディツェと広島の花たち——

いぬいとみこ・文　司　修・画

野の花は生きる

昭和47年 9 月10日初版発行

定価　600円

文・いぬいとみこ
©
画・司　修

発行所・株式会社**童　心　社**

東京都新宿区三栄町22

電話(357) 4181・4182

振替　東京 75504

写真植字・東京光画株式会社

製版・印刷・小宮山印刷株式会社

製本・難波製本

B 5 変型・21cm・112P・NDC 913.6

0393-780125-5253

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

リディツェの子どもたちに

六月、さわやかなバラの季節――でもバラの花が美しければ美しいほど、わたしの心はいたみます。

あなたがたのふるさとチェコスロヴァキアのリディツェ村が焼きはらわれ、そして小さいあなたがたが、おかあさんたちのもとからひきはなされて異国でさびしさに泣いていたとき、私はそれを知らなかった……。

あなたがたがおなかをすかせて、「何かたべものを、二本のスプーンとふたつのコップ、一本のナイフを送ってください……」と、プラハの知りあいに、幼い字で手紙を書いていたころ、わたしは保母になる勉強をして、ストーブもない教室で指をかじかませながら、毎日ピアノのけいこをしていました。

まもなく日本の町まちも空襲で焼かれ、わたしがつとめた瀬戸内海のほとりの小さな町の戦時保育園では、子どもたちのクレオンも積木もなくて、園児たちははだかのひなどりのように、しょっちゅうおなかをすかせていました。

戦争のひきおこした悲惨な運命をまず全身で受けとめるのは、いつもいつも非戦闘員である、あかんぼうや、子どもや女たちです。

八年前、あなたがたの国を訪れてわたしは、はじめてリディツェ村の悲劇を知り、大きな衝撃を受けました。そしてわたしのかつての園児たちに、いやその人たちから

生まれてきている戦争を知らない人たちのために、いつか「リディツェの絵本」を書かなくては……と思いはじめたのです。

あれから何年すぎたでしょう。そのあいだにもベトナムの村や町に戦いの火は燃えつづけ、そこで焼き殺されているベトナムの子どもたちの死に、日本のわたしたちも責任のあることを、まず日本の子どもに知らせてからでなくては、「リディツェの絵本」を書く資格はない……と、わたしは思いつづけていました。

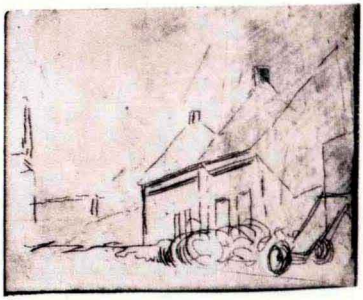
一九七一年六月末、わたしはバラのにおうリディツェを訪ねて、この本の「ひな子に」という章にあるような体験をしました。リディツェの平和公園のバラの園には広島から贈られたバラもあったけれど、その意味を日本のわたしたちはあまりに知らなすぎるのではないか……。

（どうかその意味を考えてください…わたしたちの声をみなにつたえてください…）

とささやいていたバラの花たちや、リディツェの古い村のあとに咲いていたひなげしやたんぽぽたちのかぼそいこえにはげまされて、わたしはこの本を書きはじめました。

今年の六月十日には、リディツェ村の悲劇の三十周年がめぐってきます。ベトナムでの戦いは終わっていないし、わたしたちのまわりには、新しいいくさの影さえただよっています。わたしがかつて海べの町で教えた「園児たち」が、知らないまに同時代のあなたがたへの加害者であった……というようなことが、ふたたびくりかえされないように。日本の戦争を知らない世代の人びとと、永久に七歳か八歳にしかなれない、リディツェの死んだ子どもたちに、そして広島でベトナムで生きつづける人たちに、この小さな本をささげます。

もくじ



ひなげしとたんぽぽたち
——リディツェ一九四二年六月十日　11

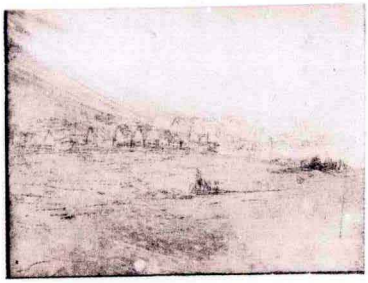
この子たちは……　21

《リディツェは　生きる》　25

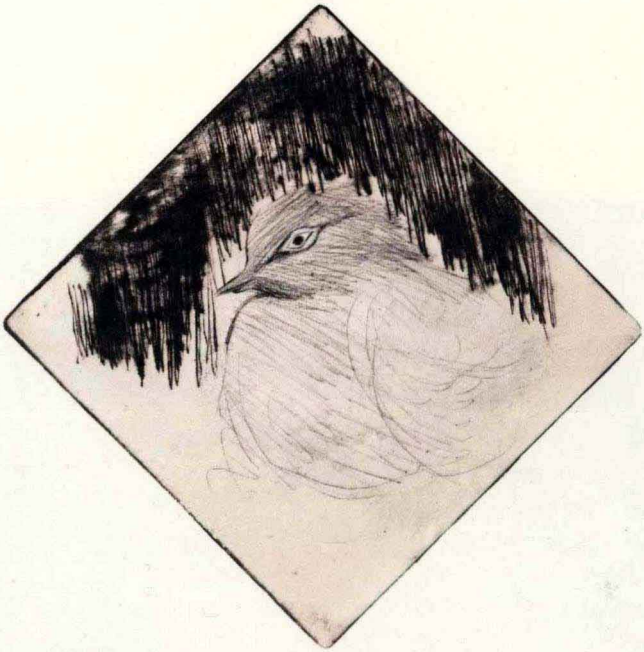
黒い十字架とバラ園と　33

一本の赤いかさの下で
——《チュア・メ・ダト》の花　45

ひな子に　57
似島の白いきく　65
みかん山で
——おばあちゃんのひみつ　79
黒いひまわり　87
デイゴの木は見ていた
——あとがきにかえて　101
この作品によせて……司　修　108



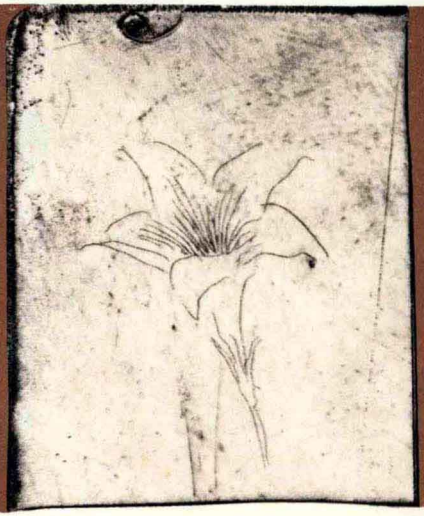
野の花は生きる



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひなげしと たんぽぽたち

——リディツェ 1942年6月10日



六月、それはそよ風と野の花とあかるい太陽の季節。麦畑の上ではひばりたちがうたい、深紅のひなげしの花のむれが、みどりの麦のかげで笑っている。

あひるたちのおよぐ小川のほとりには、水蓮の花も浮かんでいるし、川の土手と麦畑のあいだでは、アイリスやひなぎくやたんぽぽの花が、白と黄いろのさざなみをたてているし……。

あんずの木の枝で歌っていた黒つぐみは、子どもたちの足おとにおどろいて、ぱっと青空へまいあがる。村の小学校の夏休み*まえの最後の授業が終わって、子どもたちが家へ帰っていくのだ。笑ったり、さけんだり、小石をひろったりして、子どもたちは思い思いに野の道をはしっていく。

リディツェの村の六月も、このように静かであかるく、楽しげだった。あの恐ろしい夜がくるまでは。

チェコスロヴァキアの首都プラハから、炭鉱の町クラドノに向かうとちゅうにあるこのリディツェは、世界のどこにでもあるような、のどかなあたりまえの郊外の村だった。

一九四二年六月九日夜十一時半、小さな村は寝しずまっていた。犬がほえ、トラックのエンジンの音が近づき、侵入者たちがやってきた。

大好きなパパとベッドに眠っていた幼いマリアは、とつぜんパパのうでから引きはなさ

れた。マリアの母は泣きさけぶむすめをだいて、声をたてることもできなかった。

（なぜ？　いったい、なんのために……？）

理由も告げずマリアの父は家から連れだされ、ドイツ兵は残された母に命令する。

――お金と貴重品をもって、広場へ集まりなさい！

ナチの親衛隊の黒い鉄かぶとが、平和な家いえにつぎつぎ侵入して、男たちを狩り立てていく。わかい父親も、年よりも、働きはじめたばかりの少年も。十五歳以上の男たちは、ひとり残らず兵士たちに連れ去られた。

泣きさけぶ子どもたちの手をひいて、女たちは広場へ集まった。そして小学校で不安の一夜をあかす。夫たち、父たち、兄弟たちの身に起こったことは、何ひとつ知らされずに。

六月十日の夜あけから、ホラークの農場で起こったことを、リディツェの女たちは見なかった。しかし、農場にさくひなげしや、たんぽぽやひなぎくはそれを見ていた。

リディツェの男たちが十人ずつ、ナチの兵士たちの銃の前にひきだされて、農場のみどりの草の上で、目かくしもされずに撃たれていくのを。

裁判はなかった。裁判のまねごとさえも。

クラドノ炭鉱で働くひとも、百姓も肉屋もパン屋もくつ屋も。そしてプラハ市につとめる官吏も、小学校の校長も先生も、十人ずつならばされ、撃たれて死んだ。

教会の老牧師には、さすがのドイツ兵も特別の慈悲をかけるといったが、牧師はしずか

にそれをこばんでいった。

——三十五年をともに暮らしてきた村びとと、わたしはここでいっしょに死ぬ、と。

六月十日の昼、銃声はやんだ。リディツェの村にはもうただのひとりも、男は生き残っていなかったから。

一七三人の死んだ男たちの下で、血まみれになったひなげしやすみれやたんぽぽたちだけが生きつづけていた。

（なぜ？　いったい、なんのために……？）

花たちは、まぶしい太陽にきいた。しかし、太陽は答えられなかった。太陽も、六月の風も、ちょうたちも、リディツェの村に襲いかかった、とつぜんの「大量殺人」のわけを少しも知らなかった。

その朝早くリディツェの女たちは、ほろつきのトラックにのせられて、クラドノの炭鉱町へはこばれた。六時半、夜あけの光の中に見えたのは、なつかしいわが家のまどから羽根ぶとんやまくらや時計が道にほうりだされ、ナチの兵士たちが嬉々としてそれをはこんでいく姿だった。昨夜、家からもってきたお金や貴重品は、いちはやく、べつの兵士たちに、とりあげられていた。

（なぜ？　いったい、なんのために……？）

おびえている女たちにトラックの上のドイツ兵たちが、はじめて言ってきかせる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com